

第469回

広島大学医学集談会

(平成15年1月6日)

—学位論文抄録—

1. A volumetric study of amygdala in cancer survivors with intrusive recollections

(侵入性想起を有するがん生存者の扁桃体体積に関する研究)

松岡 豊

創生医科学専攻先進医療開発科学講座(精神神経医科学)

がん生存者における侵入性想起と扁桃体の形態学的関連性について検討した。この研究は倫理委員会による審査後、対象者から文書による同意を得た後に行われた。対象は国立がんセンター東病院にて初発乳がんの手術を受け、3年以上経過した55歳以下の女性患者である。侵入性想起は半構造化面接にて評価し(カッパ係数=1.0)、扁桃体体積は頭部MRI施行後、画像解析ソフトを用いて計測した(級内相関=0.94)。侵入性想起あり群(N=35)はなし群(N=41)に比して扁桃体体積が4.2%小さいことが示され、年齢、身長、うつ病の罹病期間で補正しても有意性に変化はなかった。体積差が症状発現の結果出現したのか、それとも症状発現以前に存在していたのかについては横断研究というデザイン上の制約のため不明であるが、今回初めてがん生存者の侵入性想起が扁桃体体積と有意な関連があることが示された。

2. Bcl-2 in normal tissue cells: the roles of the anti-apoptotic protein on cell senescence and death, and its clinical significance as a toxicity marker of anticancer agents

(正常組織細胞における Bcl-2: 細胞老化・細胞死に果たす役割と抗癌剤副作用予測指標としての臨床的意義)

1) Senescent cells are resistant to death despite low Bcl-2 level

(老化細胞は Bcl-2 の発現が低いにもかかわらず細胞死に耐性である)

2) Bcl-2 in cancer and normal tissue cells as a prediction marker of response to 5-fluorouracil

(5-fluorouracil 応答予測指標としての癌および正常組織細胞における Bcl-2)

佐々木 正雄

原医研 ゲノム疾患治療研究部門(遺伝子診断・治療開発研究分野)

アポトーシス抑制因子 Bcl-2 は様々なストレスによる細胞死を抑制することが知られており、正常組織細胞における Bcl-2 と細胞老化との関連、さらに有害応答予測指標としての有用性について検討した。正常組織細胞は老化とともに Bcl-2 発現が低下したが H₂O₂ および 5-FU による細胞死誘導に耐性を示し、老化した Bcl-2 導入細胞および臨床検体正常組織の Bcl-2 発現量もその 5-FU 感受性と関連しなかった。しかしながら、腫瘍細胞および若い Bcl-2 遺伝子導入正常線維芽細胞では両者は深く関連し、Bcl-2 が 5-FU による細胞死を抑制することが示された。老化細胞の H₂O₂ 誘導細胞死では細胞周期の停止がより重要な因子であることも示唆されたことから、Bcl-2 は老化細胞の細胞死感受性には深く関与せず、そうした細胞の混在が正常組織 Bcl-2 の 5-FU 副作用予測指標としての展開を困難にしているものと考えられた。

3. Impairment of splenic B and T lymphocytes in the early period after severe thermal injury: immunohistochemical and electron microscopic analysis

(重症熱傷受傷後早期における脾臓 B 及び T 細胞の障害: 免疫組織化学及び電子顕微鏡による解析)

前川 隆英

展開医科学専攻病態制御医科学講座(麻酔蘇生学)

重症熱傷後早期の脾臓リンパ球の形態学的変化を研究した。ラットに約30%の全層熱傷を作成し、2, 5, 12, 24, 48時間後に屠殺し、脾臓を摘出して、組織学的、免疫組織化学的、及び電子顕微鏡的観察を行った。その結果、組織学的観察においては、熱傷2時間後では白脾髄辺縁帯が著明に拡大し強い鬱血が見られたが、5時間後ではリンパ球数は減少していた。48時間後ではリンパ濾胞の再生所見が見られた。免疫組織化学的観察においては、B細胞は2時間後では辺縁帯に多数